

遺跡と人の交通誌——名古屋市守山区大塚・大久手古墳群

Communicational History of Archaeological Sites and People: Otsuka-Okute Kofungun (Tumuli) in Moriyama Ward, Nagoya City

犬塚康博

INUDZUKA Yasuhiro

要旨 名古屋市守山区上志段味字大塚・字大久手下にある大塚・大久手古墳群を開発する、同市教育委員会の事業計画「歴史の里」が進められている。発掘調査、国史跡追加指定、用地取得を経て、今年度から造成工が始まる。古墳群築造以来形成されてきた、同古墳群と人の交通が新たな段階を迎えるにあたり、その交通誌を整理して交通形態の分析へと進むべく本稿を草した。交通誌は、①「大塚」の時代：前近代、②長谷川佳隆の時代：前近代から近代への移行期、③「守山の古墳」の時代：近代、④後「守山の古墳」の時代：後近代、の四段階に整理できる。このうち、1954年以前の②と現在の④は、近代の希薄または不在において同質であり、権力の威信に直結する事大性において「極めて類縁性の高いことが判明した」。将来の後・後「守山の古墳」の時代に向けた課題として、字大塚・字大久手下の交通誌と上志段味の交通誌の二題への、同古墳群と人の交通の解放を提起した。

1. はじめに

筆者は、旧稿で次のように付記した。

本稿脱稿直前の2013年12月17日、「市民も古墳発掘体験／守山で全国初 整備計画」という見出しの記事が『中日新聞』朝刊1面トップに掲載された。「歴史の里」計画のひとつ、1時間500円、2泊3日5万円の古墳発掘体験は、全国初と言うより前代未聞である。急ぎ「古墳発掘体験」に反対する」（『考古学の風景』、2013年12月19日、<http://archaeologyscape.kustos.ac/2013/12/19/>）を表したが、本稿では触れなかった。稿を改めて論じたい¹⁾。

「歴史の里」は、名古屋市守山区上志段味字大塚・字大久手下にある大塚・大久手古墳群を開発する、同市教育委員会の事業計画である。平成26年度（2014）予算要求途上でおこなわれた、地元紙一紙へのリーク、かつ朝刊一面トップというドラスチックなパブリシティは、端的にプロパガンダであった。と言うのは、そこに、遺跡と人の交通を再編する権力が直観されたからである。それは、昭和46年（1971）の愛知県清須市貝殻山貝塚の国史跡指定に見られたような政治²⁾の現前であった。

名古屋市において、これに類する性格の報道は、同年7月、同市南区見晴台遺跡の歴史公園化マスタープラン公表時におこなわれたことがある³⁾。しかし、その権力性、政治性は、歴史の里ほどドロテスクでなかった。見晴台遺跡の場合が、計画局による静的なインフラストラクチャー整備であったためと思われる。歴史の里は、教育委員会自身がパフォーマ

タイプであり、社会教育行政あるいは生涯学習行政における条件整備の閾値を超える観が否めない。すでに指摘したように、尾張氏など神話的世界の動員もイデオロギッシュである⁴⁾。歴史の里とそのプロパガンダの背景に、現市長のポピュリズムや南京大虐殺に関する歴史修正主義、その他サブカル、トンデモ、反知性等々があることは、容易に察せられよう。

本稿は、大塚・大久手古墳群の「その場所⁵⁾」で、人びとはなにを欲望、欲求し来ったのかを考える。遺跡と人の交通誌の一階梯として歴史の里をとらえ、その前史をまず観察し、やがておとずれる誕生と死滅を展望する手がかりとしたい⁶⁾。

2. 「大塚」の時代

のちに大塚・大久手古墳群と呼ばれるようになる構築物が、記録にあらわれるのは江戸時代のことである。これより前の詳細については不明だが、盗掘や土取り等の関心対象となっていたであろうと想像する。

近世の村絵図における大塚・大久手古墳群表象は、志段味大塚古墳（大塚1号墳）に対しておこなわれていた。寛政4年（1792）の村絵図⁷⁾は、土饅頭様の山の側面観を単純に線描する。天保15年（1844）の村絵図⁸⁾は、同様の山の輪郭を線描し、その裾を著色して、「大塚」と明記した。そして、いずれの村絵図も、付近の字名の「大塚」を記し、志段味大塚古墳を契機とする命名であったことをうかがわせている。志段味大塚古墳は、視覚的に目だっていたのである。

このことは、明治末期の地図が、名古屋市守山区塚本古墳や大型前方後円墳の同区小幡長塚古墳、円墳の愛知県春日井市南東山古墳などの墳丘をケバで表現していたのとは異なり、独立円丘のようにして等高線を三重に巡らせ、志段味大塚古墳をあらわしていた⁹⁾ようすからも首肯できる。当時の測定のルールや、測量者のくせ等を考慮する必要があるが、ここでは、測量者に目だつ地形として映っていたのであろうと考えておきたい。ちなみに、等高線で表現されていたものには、大型円墳の名古屋市昭和区八幡山古墳があった¹⁰⁾。

一方、ほかの古墳への視線が感じられないのは、それらが平面的に立面的に小規模だったからなのかもしれない。両絵図が作られたころ、字大久手下はすでに水田化しており、東大久手古墳（大久手1号墳）、西大久手古墳（大久手2号墳）、大久手5号墳など古墳群中では相対的に大きい古墳も、何らかの改変が加えられて、地上に顕在していなかった可能性が考えられる。

近世の地誌類に、大塚・大久手古墳群に関する記述は見られない。地誌類における文化情報は、寺社、城跡にかたよる傾向があった。水野氏の城跡や神社を有する勝手塚古墳には言及する一方で、大塚・大久手古墳群が語られなかったのは、そうした故事来歴をもたなかったためであろう。

総じて、大塚・大久手古墳群は、言語化、抽象化された情報においてと言うよりは、視覚的、即物的な情報として、近世の人びとに受容されていた印象を受ける。そしてこの構造が、近世を超えて現在にも延長し、歴史の里の演者、観客双方の動機となっているように予感するのである。

3. 長谷川佳隆の時代

1) 志段味大塚古墳発掘前夜

志段味大塚古墳で考古学的な発掘調査がおこなわれたのは大正12年（1923）だが、これに先だつ考古学的動向を見ておこう。一に柴田常恵（1877-1954）の調査であり、二に『東春日井郡誌』の刊行である。

東京帝国大学人類学教室助手であった柴田常恵は、大正5・6年（1916・1917）に、少なくとも二度、上志段味をおとずれている。そのうち一度は、大塚・大手古墳群の地に立ったようであり、志段味大塚古墳墳丘の平面と立面をスケッチし、墳丘北側の濠、後円部と前方部の境の埴輪列、後円部の葺石のメモを加えて、野帳に録した¹¹⁾。このとき、勝手塚古墳もたずねて、同様の作業をおこなっている。図に添えられた、南側くびれ部出土の人物や武具の形象埴輪など遺物の情報は、別の訪問時の記録にも見られるため、くり返し同じ話を聴取していたらしい。インフォーマントは不明だが、状況的に長谷川佳隆（1880-1954）が推測される。長谷川については、後述する。

『東春日井郡誌』は、大正12年（1923）に刊行された。発掘調査と同年だが、編集過程を考慮すれば、その情報は発掘に先行する。同書は、「勝手明神の古墳」と「東谷山の古墳」を立項して、上志段味の古墳に触れた。「勝手明神の古墳」で、「此辺り古墳甚だ多く、既に発掘して田地となり、陪塚の遺れるものあり、全く形跡なきものあり¹²⁾」と勝手塚古墳の周辺を概観したのち、大塚・大久手古墳群に転じて次のように書く。

又王塚と呼び前方の部は全く壊たれ、後円部及び南西部凡そ半を穿たれ、未だ石棺の表はるゝに至らず、周囲濠の跟跡一目瞭然として残れるものあり¹³⁾、

「前方の部」「後円部」などの考古学的な術語を用いて、王塚すなわち志段味大塚古墳の、当時の現況が説かれている。また、近世の村絵図の表象はもっぱら遠景にあったが、ここには近景の描写がある。周濠のようすを書いたくんだり、東大久手古墳や西大久手古墳を指しているようにも受け取れる。

大正期は、名古屋史談会が、柴田常恵、本山彦一（1853-1932）、高橋健自（1871-1929）、喜田貞吉（1871-1939）ら研究者を招聘して講演会をよく開催したほか、大正11年（1922）には愛知県史蹟名勝天然紀念物調査会が始まっていた¹⁴⁾。こうした社会的な動きと『東春日井郡誌』との直接の関係は不明だが、無縁ではなかったと思われる。考古学的な知識や技術が、郷土の知識層に普及しつつあったようすを感じることができる。

しかし、それでもなお、「勝手明神の古墳」と「東谷山の古墳」という連続する立項は、『尾陽雜記』の「勝手の明神の森とて…」と「当国山¹⁵⁾」の二項や、天保12年（1841）成立の『尾張名所図会 後編』の「勝手明神社」と「当国山¹⁶⁾」の二項と、同一の構造を有している。さらに、連続はしないが、天保14年（1843）成立の『尾張志』に見える上志段味の「当国山¹⁷⁾」と「勝手明神ノ墟¹⁸⁾」という二項も同然であり、『東春日井郡誌』は近世的世界のうちにあったのである。

2) 志段味大塚古墳発掘の人類学

さて、大正12年（1923）、京都帝国大学の梅原末治（1893-1983）による発掘調査が、志段味大塚古墳でおこなわれる。その考古学的成果の詳細は他の参照を希うとして、本稿では発掘それ自体の人類学的考察を試みてみたい。

なぜ、志段味大塚古墳で発掘調査がおこなわれたのか、と問うところから始めよう。まずは、この前年の大正11年（1922）、2月-10月の短期間ながら第9代志段味村村長に就いた長谷川佳隆の政治性が想定できる。長谷川は上志段味在住の郷土史家、所蔵家であり、村外からの調査者、見学者は、長谷川をたずねて情報を得るのが常であった。先の柴田常恵もそうしたはずである。

では、その文化的契機はいかに。本稿は、『東春日井郡誌』に見られた、先の「未だ石棺の表はるゝに至らず」の一文に注目したい。白鳥塚古墳に言いおよんだ次の文章と対照するとき、その真意が出来る。

又当国山西麓に存する古墳に至つては、実に本郡中規模の最も広大なる古墳にして、周囲凡そ三百間、高七八間もありて、前方後円式なり、里人之れを白鳥陵と云ひ、巖然旧規模を備へり、而して後円頂中方六尺ばかり地盤陥落す、是れ石棺蓋の破壊によりたるものならんか、或は所謂塚盗人の手に係りたるものなるや、未だ之れを明かにせず¹⁹⁾。

総じて、白鳥塚古墳は既掘²⁰⁾の可能性において、志段味大塚古墳は未掘のそれにおいて、世人に認識されていたようである。この延長に、発掘調査の機会がおとずれる。

ところで、近世、近代を通じて、古墳の記述には、盗掘の有無を書きつけるステレオタイプを認めることができる。『東春日井郡誌』は、東谷古墳群について、「其の大方は発掘され、石槨及び玄室左右側の巨巖累々として耕地の辺に存在し、其の附近に祝部土器の破片狼藉たり²¹⁾」と書いた。あるいは、「里老云ふ、往時名古屋城を築くに方り、此の地方より石垣使用の岩石を給せり、其の時此等の塚を多く発掘して其の石槨の岩石を運べり、此れより塚に完全なるもの無しと、一帯の古墳は皆之れを発かれ、槨蓋、及槨側岩の良材は殆んど之れを失ひたり²²⁾」とも。同書が引用した『尾張名所図会 後編』も、「又当国山の麓に石窟の崩れたる跡多し神代の人の住し石穴のよしいひ伝えたれど古墳の石棺のあばけたるならん²³⁾」と破壊の状況を記していた。

このように、人びとはいつも、古墳が既掘か未掘かに注意してきたのである。他人への関心は、自身の関心の所在を照らし出す。古墳への関心は、みずからの「掘る／掘らない」から来していると言ってよい。その意味では、長谷川と梅原の、掘る選択が志段味大塚古墳に、掘らない選択がそれ以外の古墳におこなわれたことになる。しかしここでは、掘らない選択はあってなきがごとしであろう。当為は、掘らないことではなく、掘ることになったからである。白鳥塚古墳の後円部頂の陥没が「石棺蓋の破壊によりたるものならんか、或は所謂塚盗人の手に係りたるものなるや」「之れを明かにせ」んとすることなく、つまり清掃調査²⁴⁾や遺物回収調査²⁵⁾のようなセカンダリな状況の遺物、遺構に対する調査が発想されることはなく、「未だ石棺の表はるゝに至らず」ぬ志段味大塚古墳を掘ったということである。相当の副葬品を得たのは、結果であり、原因でもあった。そのように想い

到るとき、『守山市史』の次のくぐり、実に生き活きとしてくる。

発掘に協力した人の話によると位置からしても形からしても、出土品に特別の期待がかけられたが、予期通り運ばれなかった。前方部が畑となり後円部の東側は土取りに荒されて、墳頂にくるいがあった。副葬品埋葬の場所も予定に反したりした。最後に掘りあてて見ると次の諸出土品が発見された²⁶⁾。

概括すると、志段味大塚古墳は、築造当初はもとより近世においても、その存在を原始的に示威した。勝手塚古墳に見られたような価値、すなわち宗教性や中世的歴史性はそこになく、前方部は削平され、後円部の半分も削り取られて、世俗化の極みにあった。前近代的な「塚盗人」を否定し、それとは異なるために、近代的な考古学が求められたのかも知れない。しかし、遺物を得るために未掘墳でなければならなかったとすれば、帝国大学のアカデミズムといえども、前近代性のうちにあったと言わざるをえないであろう。

このことは、発掘後の消息にもみてとれる。出土遺物は地元には置かれることなく、昭和42年(1967)になって京都大学文学部博物館への寄贈とあいなる。梅原の発掘調査成果が、地域史の研究と教育に直接裨益することはなく、おそらくは長谷川の口述に基づきながら、ことからの伝聞がおこなわれてゆくにとどまった。たとえば、昭和2年(1927)7月から愛知県史蹟名勝天然紀念物調査会主事に就いた小栗鉄次郎(1881-1968)は、長谷川所蔵の上志段味上島出土銅剣を昭和5年(1930)に調査し、翌年に報じた際、「二、同大塚五鈴鏡、鈴杏葉其他発見²⁷⁾」と志段味大塚古墳の出土品に触れた。その翌年の「附愛知県内古墳地名表」は、摘要欄に「半破壊、遺物出土、大正八年八月梅原氏発掘²⁸⁾」と記す。昭和10年(1935)刊の『愛知県史』の記述にも、新しい内容はなかった²⁹⁾。志段味大塚古墳と人との交通の不全は、地域の歴史研究と歴史教育の低開発だったのである。

4. 「守山の古墳」の時代

1) 形態論と時間論

さて、昭和29年(1954)に守山町が志段味村を編入して合併し、守山市制が施行されると、同33年(1958)から守山市が名古屋市に合併する同38年(1963)までの5年間、守山市教育委員会が文化財事業を実施する。名守合併以後は、同42年度(1967)まで(報告書は同43年度まで)名古屋市教育委員会が事業を継続した。

調査は、考古学研究者の久永春男(1909-2011)を中心とする「野帳の会」が担い、「守山の古墳」というタイトルを共通する報告書が続刊された。長谷川佳隆が他界するその年に志段味村がなくなり、長谷川の時代が終わると同時に「守山の古墳」の時代を迎えてゆくのは、偶然とは言え奇しきことであった。

大塚・大久手古墳群では、分布調査と測量調査がおこなわれている。その成果に基づき、おおむね、古墳の形態論と時間論とにおいて考察が加えられた。

形態論は、古墳の平面形に企画のあることを認め、共通性を訴えてゆく。

前方後円墳の設計築造がほしいままなものでなく、あらかじめ定められた一定の企

画にもとずいたものであることは、志段味古墳群の特異な地方色をなす4基の帆立貝式前方後円墳においても認められる。東大久手古墳と西大久手古墳との関係がその1例である。(略)すなわち両者は各部分の法量がほぼ等しく、同一の設計図にもとずいて同一規模に築造されたものであることが明らかである。

こうした関係は勝手塚古墳と志段味大塚古墳についても見られる。

(略)すなわち志段味大塚古墳と勝手塚古墳の場合も両者はほぼ等しい形態と規模に設計されているのである³⁰⁾。

時間論は、古墳の形態論と採集遺物の時期を根拠にして、古墳の変遷モデルを想定し、他地区と比較した。当初の、久永ならびに田中稔(1925-1978)による先駆的研究³¹⁾では、帆立貝形を記していなかったが、じきに次のように書いてゆく。

(略)いまさらに注目せしめられるのは、守山古墳群では、銚子塚式→瓢塚式(前半型)→瓢塚式(後半型)という畿内型の典型的な前方後円墳の型式推移が見られるのに対し、志段味古墳群においては、銚子塚式前方後円墳→円墳→帆立貝式前方後円墳→帆立貝式前方後円墳とまったく独自の異常な推移がおこなわれていることである³²⁾。

形態論における共通性と、時間論における差異性は、一般性と特殊性の理解とも重なり、以後の大塚・大久手古墳群研究を方向づけてゆく。

伊藤禎樹(1935-)は、志段味大塚古墳と勝手塚古墳の共通、東大久手古墳と西大久手古墳の共通にとどまらず、志段味大塚古墳と勝手塚古墳の第一段上後円部墳丘の規模が、東大久手古墳、西大久手古墳のそれと一致することを見出して、前二墳の規格を縮小したものが後二墳であり、総じて「その規格は四基ともすべて共通している³³⁾」と、認識を発展させた。

愛知県重要史跡指定促進調査は、志段味大塚古墳、東大久手古墳、西大久手古墳が、「数百メートルの範囲で、いづれも同一の中位段丘端部近くを占地し、その形態も、いわゆる帆立貝式前方後円墳に類似する外形をとっている」ことから、「極めて類縁性の高いことが判明した」と結論し、「東大久手、西大久手両古墳は、主軸方向のみならず、その規模もほぼ同一である³⁴⁾」と付け加えた。墳形に対する慎重な物言いは、企画への言及の不在と関係しそうだが、裏を返せば企画論への強い意識のあらわれだったと言えよう。それ以外の形態論における共通性は、継続している。

昭和58年(1983)に、もう一つの帆立貝形前方後円墳である大久手5号墳を確認した際、筆者は地籍図上で東大久手古墳と重ねて、5号墳が「東大久手古墳と同大同形、翻って西大久手古墳とも同大同形の馬蹄形周濠をもつ帆立貝式前方後円墳であることが明らかといえる³⁵⁾」と評した。これは、正しく「守山の古墳」(の時代)へのオマージュであった。そして、その14年後に、「大久手古墳群の三つの帆立貝形前方後円墳は、同一の平面企画でつくられていた可能性が高く、これらをつくった集団の親密な関係が感じ取れる³⁶⁾」と書きつけたのも、この延長にあったのである。

2) 「守山の古墳」の時代の考古学

上記のように久永春男は、大塚・大久手古墳群を含む上志段味の古墳群の推移を、「独自の異常」と評した。また、「白鳥塚古墳には特別な事情によってこの地に造営されたが、尾張国全体を基盤として考えるべき古墳の一とし、尾張戸神社古墳→勝手塚古墳という系列を、連綿と連なった地域的変遷と見ることもできよう³⁷⁾」とする別案も示したが、その場合も「特別」という操作概念をとみなわせていた。キーワードは、「独自」「異常」「特別」である。その一方には、「畿内型の典型」が置かれていた。これは、何だったのか。

「守山の古墳」の時代の考古学は、久永が参加した昭和28年(1953)の岡山県月の輪古墳発掘運動、および1950年代の国民的科学的運動と無縁ではなかった。運動の中心および周縁を規定した当時のマルクス主義考古学の理論を概観すると、赤松啓介(1909-2000)が提起した「かゝる地域に於ける研究は、それによつて一般的把握が可能であるとともに、また地域的特質を明かにするだらう³⁸⁾」が、いわば最小限綱領となる。その奥義は、弁証法にあった。

事物の発展の根本原因は、事物の外部にあるのではなくて事物の内部にあり、事物の内部の矛盾性にある。どんな事物の内部にもこうした矛盾性があり、そのために事物の運動と発展がひきおこされる。事物の内部のこの矛盾性は、事物の発展の根本原因であり、ある事物と他の事物がたがいに関係しあひ、影響しあふことは、事物の発展の第二義的な原因である³⁹⁾。

赤松の言う「一般的把握」と「地域的特質」の二項が、「独自」「異常」「特別」において上志段味を理解した、久永の理論的構成の前提にあることはあきらかであろう。つまり、地理的実体を考慮すると、「畿内—中央—一般／守山—地域—特質＝「畿内型の典型」／上志段味—地域—特質＝「独自」「異常」「特別」」となる。矛盾は、差異性に基づく立論である。差異を了知しながら、帆立貝形前方後円墳の共通性が継続して了解されていった事態には、それが大局的には、「中央—一般」に対する「地域—特質」の論理を構築してゆく運動であったことが示されている。

たとえば、大塚・大久手古墳群と勝手塚古墳の帆立貝形前方後円墳について、伊藤禎樹がそのゆえんを地域の諸矛盾に求めたのも⁴⁰⁾、筆者が名古屋中央部の帆立貝形前方後円墳である名古屋市昭和区馬走塚古墳と、帆立貝形を推定した同市瑞穂区おどり山古墳との関係においてとらえかえそうとした⁴¹⁾のも、この運動に位置づくものであった。「中央—一般」から定義されるだけの受動的な「地域—特質」ではない、それ自身の論理を抽出してゆく試みは、「地域—特質」それ自身に内在する「中央—一般／地域—特質」を析出してゆく弁証法への理路でもあったのである。

また、出土地を離れた志段味大塚古墳の遺物が、いわゆる「里帰り」展示されてゆくのも、この動向のうちにあったと言ってよい。まず、昭和55年(1980)の名古屋市博物館特別展「東海の古墳時代」で五鈴鏡が展示された⁴²⁾。続いて同59年(1984)の同館部門展「身近なまちの考古学 守山の遺跡と遺物」では、副葬品全種の新規撮影が実施され、パネル展示される⁴³⁾。このときは、所蔵者が新館建設にともない貸出を停止していたため、実物展示ができなかったが、同63年(1988)の同館特別展「考古学の風景 名古屋における発

見と調査のあゆみ」で、一部状態のよくないものを除き、ほぼ一括で展示された⁴⁴⁾。これは、同52年（1977）に名古屋市博物館が開館してはじめて可能となったことであり、同館の意味が、地域史の研究と教育のインフラストラクチャーという点にあったことを告げている。かくして、この地域における、志段味大塚古墳と人との交通が、遺物をめぐっては70余年ぶりに再開されるのであった。

なお、これらが、文化財保護法下の文化財行政ではなく、教育基本法—社会教育法—博物館法という体系下の、博物館行政においておこなわれたことは、教育学的に正しく評価されなければならない。両者を混同しておこなわれている歴史の里とは、戦後の制度における意味が異なるのである。

5. 後「守山の古墳」の時代

さて、大塚・大久手古墳群は、地表面での観察が長く続いたあと、歴史の里計画の登場によって発掘調査を迎える。そこでは、「東西の大久手古墳が、同形・同企画であるかどうかは調査前の大きなポイントであったが、前方部の形状には大きな差（東大久手古墳はくびれが強く前方に開く）があり、同形・同企画ではないことが明確となった⁴⁵⁾」と、その課題と結論が示された。

ここには、「守山の古墳」の時代以来継承されてきた共通性への否定がある。結論に見える「大きな差」とは、大きな差が実在することの謂いではない。差を誇大する心状のあらわれであることは、調査前の「大きなポイント」と調査後の「大きな差」という単純なトートロジーが証明している。はじめから、大きかったのである。

顧みれば、「守山の古墳」の時代も、差異性が知られていないわけではなかった。東大久手古墳と西大久手古墳の「ほぼ等しく」や、勝手塚古墳と志段味大塚古墳における「ほぼ等しい」に、その形跡が認めらる。伊藤禎樹も、「ほゞ同高同大」「誤差を考えるならばほゞ同大⁴⁶⁾」と書いていた。差を認めてなお「同」を言ったのは、共通性を志向する思想性ゆえのことであった。

これは、原理的には、分節化された現実を統合する、理論への希求でもある。それがなければ、墓盗人にも満たない掘り屋の所業となろう。「守山の古墳」の時代は、形而下の現実——ばらばらの遺構、遺物——と、形而上の理論——設計、規格、企画——とは明確に区別されて、両者の結合が試みられていた。つまり、形而上の企画と形而下の遺構は混同されていなかったが、歴史の里はこれを否定し、差異性のうちに形而上下を解消したのである。

解消して、新たな理解が生まれたわけではなかった。大塚・大久手古墳群は、中央政権との関係からのみ評価されるようになってゆく。前章でみた、「一般的把握」一重の理解に収斂するのである。このとき執行されたのは、「地域的特質」に対する死刑であった。

余談になるが、東海地方の古墳研究における前方後方墳ブームは、前方後円墳体制に対する差異の唱和であった。しかし、メインカルチャーたる前方後円墳論に対し、前方後方墳論はサブカルチャーの域を出ることなく、たとえば歴史の里は、愛知県瀬戸市・名古屋市守山区尾張戸神社古墳などの前方後方墳可能性論を斥けて、前方後円墳体制を補完してゆく。そして、擯斥された差異化ゲームを、ゲームプレイヤーは大塚・大久手古墳群に延

命させたかのように見える。上記の課題と結論の担当者すなわち歴史の里自体が、尾張戸神社古墳の前方後方墳可能性論者または追随者⁴⁷⁾であり自家撞着だったわけだが、東谷古墳群分布調査担当者でもあった。その「リテラシー未満の兎戯⁴⁸⁾」を、ここで繰り返す必要もないだろう。

共通性は、形而下のくびれ部だけで立論されてきたわけではない。それを、形而下のくびれ部だけで否定するというのは、曲芸というほどの芸はなく、力技というほどの技もない、これもまた端的に兎戯なのであった。

6. 後・後「守山の古墳」の時代

伊藤禎樹は、上志段味の古墳研究史を、「長谷川佳隆の研究・活動」「久永春男の研究・活動」「伊藤（禎樹一引用者注）の研究・活動」「赤塚次郎の研究・活動⁴⁹⁾」の四項に整理した。これを対照しながら、人類学や考古学など諸学の近代性を指標にすると、本稿のここまでを次のようにまとめることができる。

- ①「大塚」の時代：前近代。伊藤は未立項。
- ②長谷川佳隆の時代：前近代から近代への移行期。「長谷川佳隆の研究・活動」。
- ③「守山の古墳」の時代：近代。「久永春男の研究・活動」「伊藤の研究・活動」。
- ④後「守山の古墳」の時代：後近代。「赤塚次郎の研究・活動」。

その上で、いまはまだはじまっていない、後・後「守山の古墳」の時代の課題を、次の二項において展望しておきたい。

1) 字大塚・字大久手下の交通誌

大久手5号墳を報じた際に筆者は、大塚・大久手古墳群造営集団の関係について「重層化」ならびに「重層性⁵⁰⁾」の語を用いてその印象を書きつけた。このときこの語は、多層の意味あいを強くしていたが、実は、古墳群のある字大塚・字大久手下の一带は、古墳論への矮小化を拒むかのごとき重層性をはらんでいたのである。

1980年代前半、地元住民への聴きとりによって、大久手池は大部分が公有であり、その部分の堤防の水面側はコンクリートで護岸され、その他民有の部分の堤防は護岸されずに土が露出していることを教えられた。昭和46年（1971）測量の地図⁵¹⁾（図参照）では、堤防が5号墳の南端で屈折するのが見てとれるが（図のA）、そこから北東側が民有である。したがって、5号墳の東側、水面側の護岸されていない堤防法面で埴輪片や須恵器片が採集された際は、それが同古墳にともなうものであろうと考えることは容易であった。

また、この箇所を目指すようにして、南東方向から島状または半島状にのびる陸地（図のB）がある。明治44年（1911）の地図⁵²⁾によると、大久手池の北東辺の堤防に見えるが、これも民有と聞いた。そうした所有関係の変更点に、5号墳は位置していたのである。このことには、時代を特定することができないが、5号墳築造よりのちの世の人たちにとって、この古墳が何らかのマークとしてとらえられていたことをうかがわせるものがある。

疑問は連鎖する。5号墳にとどまらず、6号以降未知の古墳の墳丘が、堤防のほかの場

所にも埋め込まれて存するのではないか。広大な大久手池の中に、破壊された古墳があるのではないか。むろん未知の古墳は、堤防内や池内に限られない。さらには、大久手池後方の丘陵の小谷から大久手下の小谷に続く小水系に依拠した集落はなかったか。狭義には、古墳造営キャンプを想定してよいかもしれない。

なおこれらは、大久手池が古墳群成立以降のものであった場合の可能性に向けた問いの一端だが、大久手池の成立自体がよくわかっていない。寛政4年（1792）の村絵図には、大久手池後方に「大洞池」が見えている。これは、丘陵の小谷から大久手下の小谷に連なる、小水系の上流部をせき止めた谷池と思われる。その小水系を擁した広域の湿地（くて、くで）つまり「大久手」が、大塚・大久手古墳群の立地する段丘上にかつて存在し、それを利用して大久手池は営まれたのであろう。大久手池は皿池である。堰堤は長大で、多くの土量を要したに違いない。古墳の盛り土を移設し転用するだけでなく、現にある古墳をつないで堰堤が設計された部分があったとしても不思議はないのである。

また、「しし塚」と呼ばれたマウンドが、5号墳の近くに存在した⁵³⁾。天保15年（1844）の村絵図に描かれた「鹿垣」の一部とみなせるものだが、古墳の墳丘に接続していたのではないか、堤防同様に墳丘の土を転用したのではないか、と思わせる構築物であった。

ところで、この近世遺跡の考古学的調査はおこなわれたのだろうか。鹿垣は、大久手池南西側の字稲堀田新田にも当時存在していた（図のC⁵⁴⁾）。1980年代以降、近世都市（城下町）遺跡をあれほど調査した名古屋市教育委員会であるから、近世農村遺跡を調査しない理由はどこにもない。

ことほど左様に、大塚・大久手古墳群は、その場所性において重層的であり、これを一面的に固定化する歴史の里から解放されなければならない。換言すれば、歴史の里をこの場所性に解放するということである。これが、後・後「守山の古墳」の時代の第一テーゼである。

平成26年（2014）10月、その3年前に起きた、名古屋市守山区天白・元屋敷遺跡の不法大規模破壊事件が報道⁵⁵⁾されたとき、「志段味には古墳しかないと思っていた」旨のツイートが散見された。これは、歴史の里の古墳至上主義に罹患した、遺跡と人の交通の病である。「志段味古墳群」と言いながら私有地の古墳破壊を許認し、この地域の遺跡群の、古墳のみにあらずトータリティを分断して格差化し、それにより地域史の部分化、単純化を将来しているにもかかわらず、「歴史」と名づけて普遍性を僭称する歴史の里の自己欺瞞を、観客に投影し、共犯に仕立て上げるシーンを観ているかのようであった。第一テーゼは、この問題と深くかかわって提起されている。

2) 上志段味の交通誌

(1) 志段味大塚古墳と永仁の壺

さて、久永春男のキーワード「独自」「異常」「特別」に注目するとき、一見関係のない複数の事象を貫く、上志段味の精神のようなものが透けてくる。

官学アカデミズムを動員した古墳の発掘調査は、名古屋地方では志段味大塚古墳がはじめてであり、それ自身が尋常ならぬ事態、つまり「独自」「異常」「特別」であった。この調査を地元側で政治・文化的に担った長谷川佳隆のキャリアは、そののち永仁の壺事件⁵⁶⁾に連なってゆく。これは、長谷川を貶めることでない。しかし、事件そのものの「独自」

「異常」「特別」は、首肯されるであろう。長谷川は、虚構たらざるをえない歴史の本質に殉じた、虚構をそのままに生きた人であった。そのように考えるとき、志段味大塚古墳と永仁の壺が、長谷川とこの地域にとってパラレルな事象であった可能性に思いおよぶのである。

そして、志段味大塚古墳には梅原末治、永仁の壺事件には加藤唐九郎（1897-1985）という、長谷川よりひとまわり以上若年のパートナーがいた。梅原と加藤は、長谷川にとっての虚構の「制度」だったのではないか。前者の考古学と、後者の陶芸というジャンルと専門性が、長谷川の郷土史を支えたことに想到する。

誤解をおそれずに付言すれば、発見後紛失した上志段味上島出土銅剣の「馬屋の壁間に突刺しありしを見出し⁵⁷⁾」と、上志段味・高蔵寺付近で「頭椎大刀を掘出し茅葺屋根に刺込み置き所在を失った事⁵⁸⁾」という体験の同型には、遺跡・遺物と人の交通の物語のステレオタイプが感じられる。そして、第一発見者の刑部新九郎、報告者の小栗鉄次郎と京都帝国大学の島田貞彦（1889-1946）がいた。ここでも、長谷川にはパートナーがいたのである。小栗と島田は、梅原や加藤と同様に機能したことであろう。

発掘をよくしながら、長谷川の著作があまり知られていないのは、このような役割演技に理由が求められるかもしれない。

(2) 上志段味古墳研究のナラティブ

そうした長谷川に、「上代文化と尾張氏」の著作があるという⁵⁹⁾。筆者は未見だが、『守山市史』が「古墳時代と守山氏」の項で参照している長谷川説とは、ここからのものだろうか。長谷川の地元である上志段味を説いた次の部分は、長谷川ならではである。

郷土東谷山ろくと庄内川北岸の高蔵山ろくとを中心に繰り広げられた産業文化圏は、大和勢力に融合、東西文化の交流と大和文化の発展に寄与し、尾張氏発展の歴史に一段の光彩を添えたというべきであろう。

この地に見る古墳は、尾張氏の陵墓を主とするものと見られるが、内には原始以前のものもあろうし、大和文化の高潮期に属する二重堀の前方後円式古墳もあって、大陸文化移入の盛時もうかがわれるが、原始民族に大和氏族の与えた影響は大きく、濃尾平野の農業生産を支配した力は大きい。（長谷川佳隆氏説 一部摘録⁶⁰⁾）

これを長谷川のものとして、以下行論しよう。ここにある構造は、「大和／郷土（東谷山麓・高座山麓）」である。そして、後者の前者への融合、その結果の双方の交流と後者の前者への寄与、それによる尾張氏の発展が説かれる。またこの地は、尾張氏と原始民族とで構成され、大和一尾張氏が原始民族に影響を与える関係も構想されている。「大和一大和氏族＞「郷土一尾張氏＞原始民族」となる。抽象すれば⁶¹⁾、「中枢／「衛星的中枢／衛星的衛星」だが、衛星的衛星が不明な分だけ、現状は「中枢／衛星的中枢」の一重のモデルに偏してゆく。

ところで、上志段味の古墳群に関する最新の評価のひとつは、次のように書いていた。

第二。志段味古墳群では、全時期を通じて、王権との密接な関わりのなかで古墳が造営されており、王権の地方経営の推移が古墳群造営の様相、すなわち古墳群の途絶・

復活、古墳群の構成の変化などに如実に反映されている。王権の地方政策の変化と地方の古墳群の消長が相関関係にあることを、一つの古墳群で跡付けられる点に学術的な意義を有する⁶²⁾。

構造は「王権／地方」であり、二項の関係は、前者から後者に対する経営、政策として語られる。単純な、「中枢／衛星」モデルである。

このように見来ると、長谷川の時代と現在とにおける上志段味の古墳群に関する理解は、ほぼ同型であることに気づく。現在の停滞を誹り、長谷川の理論的優越を賞揚することは容易だが、それよりもむしろ、上志段味の古墳研究のナラティブをここに読み取るべきと考える。長谷川は、志段味村や高蔵寺町の古墳を掘り、志段味大塚古墳の発掘にも関与して、如上を構想した。その長谷川の発掘とは比べものにならないほどの物量を投下した歴史の里の調査が、長谷川の追隨に結果している理由が問われなければならない。

物質文化において雲泥の差がありながら、精神文化において同型のナラティブに内在されていたのは、前近代から近代への移行期の前者と、後近代の後者に共通する、近代の希薄または不在によるものと考えられる。歴史の里に見る近代の不在は、「守山の古墳」の時代の近代を破壊したことに連なっている。「地域の特質」を喪失すれば「一般的把握」一重の事大主義の陥穽に陥るといふ、封建的郷土研究⁶³⁾の見本のごとき歴史の里なのである。

(3) 権力の威信への直結

続けよう。昭和2年（1927）、愛知県史蹟名勝天然紀念物調査会が展覧会を開催するのに先だち、次のような報道がおこなわれた。

（略）これ（展覧会のこと一引用者注）がため各調査委員は目下出品の蒐集に努めて居り殊に中央線高蔵寺一帯は洪積層であつて古くより開けてゐた土地であるので古墳墓に富みこれが発掘は学界に貢献する処が多いので内務省に対し手続きを済ませ次第近く発掘に著手し展覧会をして一層有意義のものたらしめんと意気込んでゐる。（新愛知、一、九⁶⁴⁾）

展覧会図録⁶⁵⁾はすべての展示品を掲載していないため、実際のところがわからないが、上の記事以後に発掘された中央線高蔵寺一帯すなわち高座山麓、東谷山麓の古墳出土品は同書に見当たらず、この発掘が実施されたかどうかあきらかでない。しかし、発掘が検討されていたことそれ自身に、注意が喚起されるのである。

この展覧会は、愛知県の文化財行政の記念碑的事業であった。地方行政権力の威信に直結する場面で、古墳発掘を理由に上志段味を含む地域が注目されていた事態には、当地の社会関係資本の在処とそこから出来る政治性の如何に関し、強い示唆がある。長谷川が、同展に関連して愛知県史蹟名勝天然紀念物調査会臨時委員に就いていたことにも、所蔵品の出品者としてばかりではない理由があつたのではないだろうか。

そして、これが一回限りの偶然ではなかったことを、歴史の里が証明するのである。歴史の里は、国庫補助事業を含む調査を継続し、国史跡追加指定をも果たし、国家権力をフルに動員した地方行政権力の、紛うことのない威信行為として営まれている。その飾らないありのままの姿が、90年近く前の展覧会準備過程を照射するだけでなく、彼我の通底を

開示するのは、見事と言うよりほかはない。権力の威信に直結する構造と関係は、長谷川の「大和に融和する郷土」、歴史の里の「王権に経営、政策される地方」に等しいことも、絵に描いたごとしである。

ここに私たちは、この事大的な傾向が、上志段味をめぐる一貫して存するのではないか、という問いに逢着する。あるいは、1930年代の修養道場日本会館誘致、1940年代前半の永仁の壺にまつわる真偽不明の話題群、天祖光教誘致などは、これに連なることがらなのかもしれない。後・後「守山の古墳」の時代の第二テーゼ、上志段味の交通誌が求められるゆえんでもある。

7. おわりに

長谷川佳隆は「大和に融和する郷土」を構想し、虚構を生きた。歴史の里も「王権に経営、政策される志段味古墳群」を描く。さて私たちは、そこに虚構の再演を観ることになるのだろうか。長谷川の虚構は、考古学や陶芸という「制度」を動員し、属人的にパートナーもいた。いまもパートナーはいる⁶⁶⁾。そう言えば、歴史の里が梅原末治によく言及していたのも、長谷川のパートナーの転用、流用のようであり、長谷川化の欲望の表出だったのかもしれない。後近代の、前近代への自覚なき先祖返りとして――。

平成5年(1993)以降、上志段味では特定土地地区画整理事業がおこなわれている。これによって長谷川家の旧宅は失われたが、ランドマークのごとき庭のクスノキの巨木は残された。永仁の壺の出土が最初に伝えられた、長谷川宅傍の地点はどうなったであろう⁶⁷⁾。発見場所として次に伝えられるようになっていった、ジグド(神宮堂)はいかに。区画整理で変わってしまうそれらの場所の、考古学的調査はおこなわれたのであろうか。永仁の壺の虚構が歴史の里に接続してゆくとするれば、虚構とは、このように世人の当為とかかわりなく、永続的に自己実現してゆくものなのかもしれない。出土品か伝世品か不明ながら、ジグドの場所情報をもつ菊桐文鏡⁶⁸⁾は、いまもある。

注

- 1) 犬塚康博「経験と歴史の断絶——『志段味古墳群』の検討」千葉大学大学院人文社会科学研究科編『千葉大学人文社会科学研究』第28号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、2014年、236頁。
- 2) 同「朝日遺跡の精神史」千葉大学大学院人文社会科学研究科編『千葉大学人文社会科学研究』第30号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、2015年、177-186頁、参照。
- 3) 「『見晴台』中心に遺跡公園／歴史と自然の緑地に／考古資料館も建設／杉戸名古屋市長が発表」『中日新聞』、1971年7月19日。
- 4) 犬塚康博「経験と歴史の断絶——『志段味古墳群』の検討」、234頁、参照。
- 5) 平成25年(2013)4月7日、任期満了に伴う名古屋市長選挙がこの日告示され、筆者は候補者のポスター掲示を手伝うため、この地域を知人の自動車で移動した。そのとき不意に、志段味大塚古墳に出くわした。仕事を終えた帰りにもう一度おとずれ、大塚・大久手古墳群を歩いた。その夜、詞曲「その場所」ができあがり、同年6月2日に初演した。
- 6) 本稿における引用は、旧字体から新字体への改変、ルビの削除にとどめ、かなづかい、拗促音、句読点、地名、誤脱字などは原文のままとした。人名、組織名の敬称は省略し、字体は統一していない。
- 7) 名古屋市上志段味特定土地地区画整理組合編・名古屋市教育委員会小島一夫監修『上志段味誌』、名古屋市上志段味特定土地地区画整理組合、1997年、101-102頁。
- 8) 同書、103-104頁。
- 9) 『二万分之一地形図名古屋近傍第七号(共二十二面)水野村』、大日本帝国陸地測量部、1911年、『二万

- 分一地形図名古屋近傍第十一号（共二十二面）勝川村」、大日本帝国陸地測量部、1911年、参照。
- 10) 『二万分一地形図名古屋近傍第十二号（共二十二面）名古屋東部』、大日本帝国陸地測量部、1911年、参照。
 - 11) 國學院大學所蔵柴田常恵資料、参照。
 - 12) 『東春日井郡誌』、ブックショップ「マイタウン」、1987年、1074頁（原本：東春日井郡役所編、1923年）。
 - 13) 同書、1074頁。
 - 14) 犬塚康博「考古学の風景」・「年譜・文献目録」犬塚康博・名古屋市博物館『考古学の風景 名古屋における発見と調査のあゆみ』、名古屋市博物館、1988年、71-99頁、参照。
 - 15) 『尾陽雜記』、愛知県郷土資料刊行会、1977年、408-409頁（原本：愛知県教育会編、1932年）。
 - 16) 岡田啓・野口道直・小田切春江『尾張名所図会 後編』一、四ノ三十丁表、http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru04/ru04_03376/ru04_03376_0011/ru04_03376_0011.pdf(2015年6月23日)。
 - 17) 深田正韶撰、中尾義稲・岡田啓編『尾張志』上巻、愛知県郷土資料刊行会、1979年、758頁。
 - 18) 同書、923頁。
 - 19) 『東春日井郡誌』、1074-1075頁。
 - 20) 長谷川佳隆が戦後（1952-1959年推定）に作製した「愛知県古墳時代遺跡地名表 志段味」（原本は手書き謄写版印刷）には、白鳥塚古墳について「現存し仮発掘されたることなく」とある。これは、長谷川の直接知り得る発掘がおこなわれていないという意味である。同表は、長谷川より前の発掘に言及していない。なお、発掘はしていないが同古墳の調査者として、梅原未治、中山英司、鳥居龍蔵、大場磐雄の苗字が博士の称号とともに記されている。長谷川は、彼らの調査に同行したのであろう。伊藤禎樹「上志段味の古墳を考える」、志段味の自然と歴史に親しむ会2月例会配付資料、1996年2月18日、1頁、参照。
 - 21) 『東春日井郡誌』、1075頁。
 - 22) 同書、1075頁。
 - 23) 岡田啓・野口道直・小田切春江、前掲書、四ノ三十丁表。
 - 24) 『守山の古墳』、守山市教育委員会、1963年、62-70頁、参照。
 - 25) 株式会社二友組編『天白元屋敷遺跡』、名古屋市中志段味特定土地区画整理組合、2012年、参照。
 - 26) 『守山市史』、愛知県守山市役所、1963年、21頁。
 - 27) 小栗鉄次郎「志段味村銅剣出土遺跡」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9、愛知県、1931年、84頁。
 - 28) 「附愛知県内古墳地名表」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第10、愛知県、1932年、74頁。
 - 29) 愛知県編『愛知県史』第1巻、愛知県、1935年、49-51頁、参照。
 - 30) 久永春男「考察」名古屋市教育委員会編『守山の古墳 調査報告第二』、名古屋市教育委員会、1969年、87-88頁。
 - 31) 同「結語」『守山の古墳』、107-111頁、田中稔「尾張地方における前方後円墳・前方後方墳の分布」、同書、113-116頁、参照。
 - 32) 久永春男「名古屋市守山区の前方後円墳——補説——」七原恵史編『名古屋市東部の前方後円墳』、東海古文化研究所、1968年、22頁。
 - 33) 伊藤禎樹「尾張の大型古墳」『考古学研究』（第19巻第2号）通巻74号、考古学研究会、1972年、71頁。
 - 34) 『愛知県重要遺跡指定促進調査報告VII』、愛知県教育委員会、1983年、13頁。
 - 35) 犬塚康博「守山で古墳発見」『名古屋市博物館だより』第34号、名古屋市博物館、1983年、5頁。
 - 36) 同「古墳時代」新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第1巻、名古屋市、1997年、371頁。
 - 37) 久永春男「結語」、111頁。
 - 38) 赤松啓介「古代聚落の形成と発展過程——播磨加古川流域の研究——」『経済評論』第4巻第2号、叢文閣、1937年、5頁。
 - 39) 毛沢東「矛盾論」『毛沢東選集』第1巻、外文出版社、1968年、448-449頁。
 - 40) 伊藤禎樹「尾張の大型古墳」、71-72頁、参照。
 - 41) 犬塚康博「古墳時代」、383-388頁、参照。
 - 42) 水谷栄太郎・名古屋市博物館『第5回特別展 東海の古墳時代』、名古屋市博物館、1980年、70-71頁、参照。
 - 43) 犬塚康博・名古屋市博物館『守山の遺跡と遺物 部門展「身近なまちの考古学——守山の遺跡と遺物」展示図録』、名古屋市博物館、1984年、21-23・69頁、参照。
 - 44) 同『考古学の風景 名古屋における発見と調査のあゆみ』、39-40・103頁、参照。
 - 45) 名古屋市見晴台考古資料館編『志段味古墳群〔本文編〕』（名古屋市文化財調査報告79、埋蔵文化財

- 調査報告書62)、名古屋市教育委員会、2011年、169頁。
- 46) 伊藤禎樹「尾張の大型古墳」、71頁。
 - 47) 服部哲也「愛知県尾張地方の前方後方墳」『古代』第86号、早稲田大学考古学会、1988年、34・36頁、参照。
 - 48) 犬塚康博「経験と歴史の断絶——『志段味古墳群』の検討」、236頁。
 - 49) 伊藤禎樹「上志段味の古墳を考える」、1-8頁、参照。
 - 50) 犬塚康博「守山で古墳発見」、5頁。
 - 51) 名古屋市計画局都市計画課『上志段味』（1：2,500／名古屋都市計画基本図／VII-MD 77-3）、財団法人名古屋都市整備公社、1972年。
 - 52) 『二万分一地形図名古屋近傍第七号（共二十二面）水野村』、参照。
 - 53) 小池邦彦「しし塚の記憶をさかのぼって」『私たちの博物館 志段味の自然と歴史を訪ねて』第5号、志段味の自然と歴史に親しむ会世話人会、1986年、2-5頁、参照。
 - 54) 同論文、2-5頁、参照。
 - 55) 「不法造成で遺跡を破壊／名古屋市公社「手続きミス」／近くに国史跡 古墳群／残土から土器3万点」『中日新聞』、2014年10月20日。
 - 56) 小野勝年「彙報／永仁二年銘瀬戸瓶子」日本考古学会編『考古学雑誌』第33巻第7号、吉川弘文館、1943年、61頁、参照。
 - 57) 小栗鉄次郎、前掲論文、82頁。島田貞彦「尾張国東春日井郡志段味出土の細形銅剣」考古学会編『考古学雑誌』第21巻第2号、聚精堂、1931年、62頁、は、「長谷川氏から聞承するに（略）刑部氏宅の改築に当り馬小屋の壁にかゝりあるを発見し」と書いていて、情報が微妙に変化している。
 - 58) 小栗鉄次郎、前掲論文、85頁。
 - 59) 『守山市史』、13頁。
 - 60) 同書、18頁。
 - 61) 武藤一羊「ガンダー・フランク『資本主義とラテン・アメリカにおける低開発』「連帯」編集部編『新帝国主義論争』、亜紀書房、1973年、80頁、は、「都市的中心（Metropolitan Centers）と周辺の衛星部分（peripheral satellites）」を「都市中心または都市／衛星」と略記してゆくが、本稿は名詞を採り「中枢／衛星」とした。本稿前出の「中央／地方」は、これに対応する。
 - 62) 深谷淳『尾張の大型古墳群 国史跡 志段味古墳群の実像』、名古屋市教育委員会文化財保護室・株式会社六一書房、2015年、33頁。
 - 63) 犬塚康博「古墳研究の精神史——1970年代名古屋から眺める」千葉大学大学院人文社会科学研究科編『千葉大学人文社会科学研究』第29号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、2014年、176-185頁、参照。
 - 64) 「彙報／新聞所見／今秋名古屋で考古学展を催す」考古学会編『考古学雑誌』第17巻第2号、聚精堂、1927年、88頁。
 - 65) 『愛知県史蹟名勝天然記念物』、愛知県史蹟名勝天然記念物調査会、1927年、参照。
 - 66) 「六一書房／書評リレー／書評：尾張の大型古墳群 国史跡 志段味古墳群の実像」、http://www.book61.co.jp/book_review.php/81（2015年6月20日）。
 - 67) 小野勝年、前掲論文、61頁、は、「字白鳥出土」と書く。やはり、情報は変動しているのである。
 - 68) 犬塚康博「菊岡文鏡」犬塚康博・名古屋市博物館『守山の遺跡と遺物 部門展「身近なまちの考古学——守山の遺跡と遺物」展示図録』、61頁。

〔付記〕本稿をなすにあたり、伊藤禎樹氏、飯尾恭之氏、櫻井隆司氏、野田輝己氏、田中久氏、福井淳一氏に協力いただきました。記して感謝の意を表します。



図 名古屋市守山区上志段味字大塚・字大久手下旧状図（1：5,000）

名古屋市計画局都市計画課『上志段味』（1：2,500／名古屋都市計画基本図／VII-MD 77-3）、財団法人名古屋都市整備公社、1972年、に、本稿で参照した文献等から得た情報を加筆して作成した。その際、文字情報はメイリオ体であらわし、記号は大きさを考慮せずに場所を指示するにとどめた。